

4 中国における造瓦技術の変遷

— 「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換を中心に—

佐川 正敏

(東北学院大学)

A はじめに

中国における確実な瓦の起源は西周代である。西周代の瓦は、粘土紐を巻き上げて製作する「粘土紐巻き作り（泥条盤築法）」という技法を採用しており、内面すなわち凹面に凹凸を残すことが多い。凹面の調整が不十分な場合には、丸・平瓦の凹面に紐巻きの痕跡が残される。

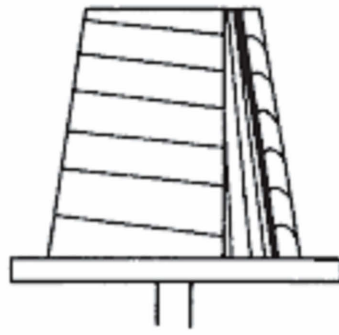
西周代以降も粘土紐巻き作りは主流であったが、前漢以後は円筒形か円錐台形の杵や杵板を連結した桶を内型（模骨）とするようになり、丸・平瓦の凹面に布目や連結模骨の凹凸が残される（図1）。土管状に仕上げたものを二つ割りにすれば丸瓦となり、井戸杵状に大きく仕上げたものを四つ割りすれば平瓦となる。

筆者は、1991年から開始した黄河流域以北における断続的な瓦調査の成果に基づき、粘土紐巻き作りが、少なくとも当該地域において、唐代はおろか、遼、金代まで主流であったという見通しを示した（図2-②~④：佐川1992、2006）。また、2005年からは、奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との間で進行中の瓦の共同研究に参加する幸運に恵まれ、北魏代から唐代までの首都であった平城（大同市）、洛陽（偃師市、洛陽市）、鄴城（邯鄲市）、長安（西安市）でも、粘土紐巻き作りが主流であったことを確認している（中国社会科学院考古研究所ほか編2008、本書附載参照）。

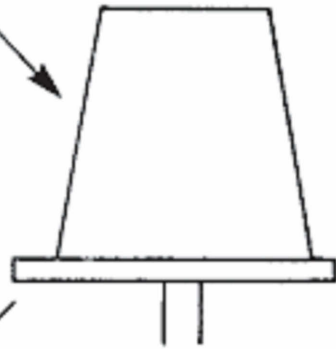
これに対して、明代末期の1637年に宋応星によって編纂された技術の百科全書『天工開物』には、平瓦を製作する際、鉄線を張った弓で粘土ブロックから粘土板を切り取り、円錐台形の桶（杵板連結模骨）に巻き付けている平瓦製作の状況が描かれている（図3：藪内訳注1969）。この技法を「粘土板桶巻き作り（泥板圍築法：佐川の造語）」という。やや大型の平瓦を製作する場合は、桶に3~4枚の粘土板を貼り付けて粘土円筒を完成させ、4分割した。

さて中国では、粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの変化が、いつ、どこで、どのように発生し、普及したかについては、従来、十分検討されることはなかった。筆者はこの問題について2002年以来追究してきたが、とくに近年は、2006年1月に日本九州の福岡市博多遺跡群出土瓦（福岡市埋蔵文化財センター）、2006年2月に中国河南省鞏義市の北宋皇陵遺跡出土瓦（河南省文物考古研究所）、そして2006年10月に浙江省杭州市の雷峰塔遺跡出土瓦（浙江省文物考

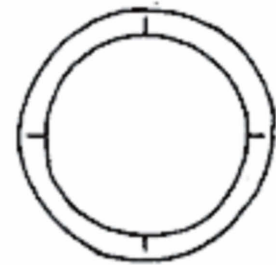
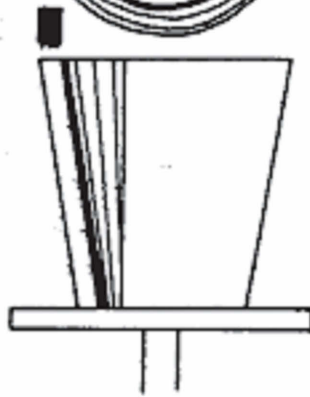
1、粘土紐桶巻き作り
Clay Cylinder by
Coiling Method
on a Turn Table.



2、円錐台形の粘土
円筒の成形と調整
Shape Formation
and Surface
Modification.



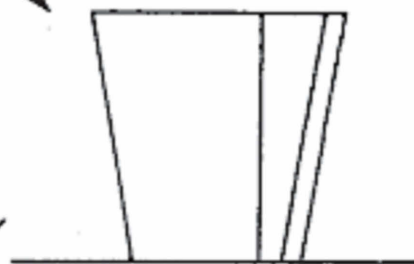
3、円錐台形の粘土円筒の
逆転と上方からの施文
Over turning of a Clay
Cylinder and Decoration
from the Upper of a Clay.



5、半乾燥後に4分割、
凹凸面を磨く
Partition and Polish.



4、分割截線を入れ、乾燥
Adding Partition Guide
Lines and Dryness.



6、焼成、黒色化
Baking and Smoke.

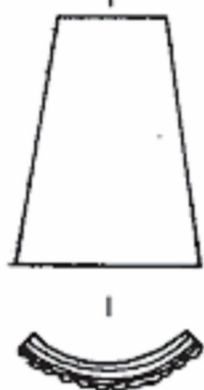


図1 粘土紐桶巻き作りの復元

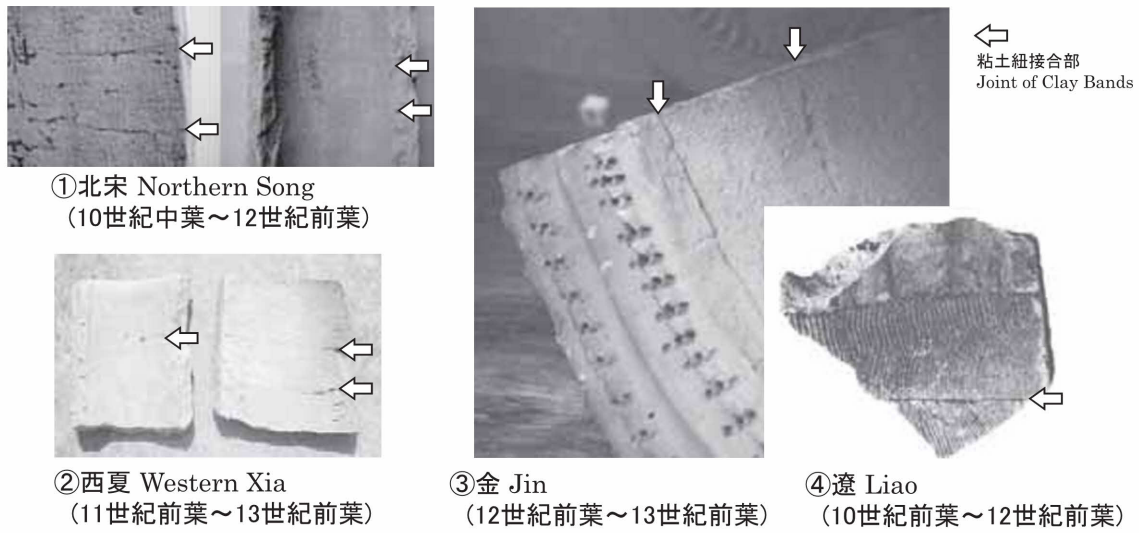


図2 北宋・遼・西夏・金代の瓦における「粘土紐桶巻き作り」の痕跡

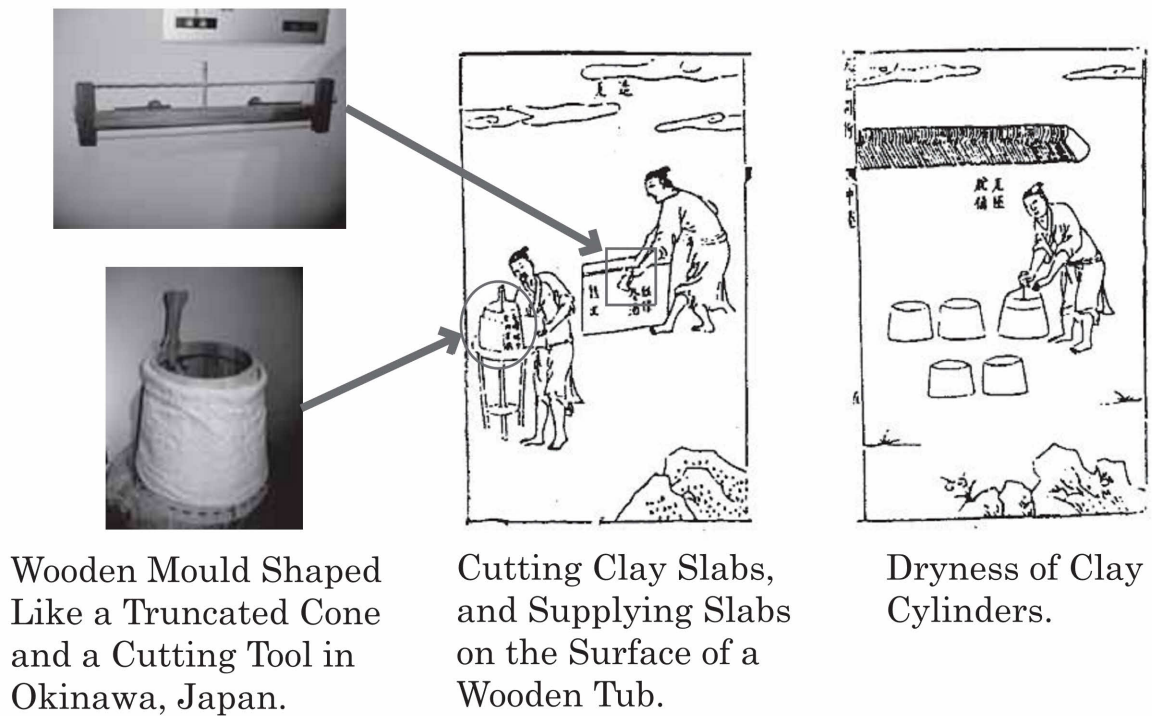


図3 『天工開物』(1637年)中に掲載された明代の「粘土板桶巻き作り」

古研究所)、2006年12月に江蘇省南京市の南朝首都・建康出土瓦(南京大学文化與自然遺産研究所)および揚州市の揚州城出土瓦(中国社会科学院考古研究所揚州隊・揚州市文物考古研究所)、さらに2008年2月に広東省広州市の南越国官署遺跡出土瓦(広州市文物考古研究所、南越王宮博物館籌建処)に対しておこなった調査の結果、この問題について一定の結論(仮説)を得ることができた。

本稿では、主として、丸・平瓦の成形技術である粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換について知り得た成果を、調査経緯に沿って報告し、仮説を提示する。つぎに、軒丸瓦と丸瓦の南北差、軒平瓦の南北差について報告する。さらに、黒色研磨瓦(中国でいう青棍瓦)を含めた軒平瓦の多様化と等級について報告する。

B 粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換について

1. 元代の辺境で確認された粘土板巻き作り—調査の契機—

2005年1月に、東北学院大学の榎森進氏の文部科学省科研費による調査に同行し、ウラジオストック市にあるロシア科学アカデミー極東支部・歴史学考古学民族学研究所にA.R.アルテムィエフ氏を訪ねた。その目的は、同氏が発掘調査した明代ヌルカン都司に造営された永寧寺跡の出土遺物を観察することであった。

その際に、偶然にもアルテムィエフ氏は、ザバイカル地方東部で発掘したモンゴル帝国の祖チンギス=ハーンの甥のエスング=ハーンが創建した都城から出土した13世紀中葉~15世紀前葉の瓦も観察する機会を与えてくれた。その中には多くの緑釉瓦があったので、これはモンゴル帝国段階のものではなく、元代にその都城を継続使用した際に生産、供給した瓦と推定される。そして、一枚の緑釉平瓦の凹面に「糸切り痕」が存在することを発見した。糸切り痕は、粘土紐巻き作りでは発生し得ない痕跡であり、粘土板巻き作りの存在を裏付ける重要な証拠の一つである。このことによって筆者は、粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が、少なくとも明代より古い元代までには発生していたという見通しを得た。

つぎに、明代ヌルカン都司の永寧寺跡は、河口であるオホーツク海まで約153kmのアムール川に面する断崖上に残されている。アルテムィエフ氏が1995~2000年に発掘調査をおこない、明代2時期の寺院跡と元・明代の遺物を発見した(A.R.Artemiev 2001、同2005)。かつてここに立てられ、現在ウラジオストック市内に移動された2基の永寧寺碑によって、この2時期の遺構は、一つが永樂帝の段階の1413年に造営されたもので、もう一つは前者が焼亡したのち、宣徳帝の段階の1433年に別の地点に再建されたものであること、また永寧寺造営に際しては、造瓦工人を同行したことがわかる。アルテムィエフ氏によれば、アムール河畔で窯跡も確認されているという。

アルテムィエフ氏から観察を許された遺物には、明代2時期の永寧寺所用瓦が含まれており、そのうちの平瓦凹面には、糸切り痕と粘土板合わせ目が明瞭に残されている(図4-①)。した

がって、明国の辺境地に建設された永寧寺の瓦も、粘土板巻き作りによって製作されていたことがわかる。

アルテミエフ氏は、1433年の再建永寧寺跡の調査地から、明代の瓦とは文様や焼き質が明瞭に異なる「古風な瓦」が若干出土していることを指摘し、それを元代の1260～1320年段階に設置された征東元帥府に付属する観音寺に関連するもの、と推定している(A.R.Artemiev 2001、同2005)。しかし、筆者は、2005年1月に、この古風な瓦を観察する機会がなかった。

アルテミエフ氏は、2005年11月に北海道大学で開催された国際シンポジウム「ヌルカン永寧寺碑文と中世の東北アジア」に出席するため来日し、その時に、刊行されたばかりの永寧寺跡の発掘調査報告書『アムール川下流域における15世紀の仏教寺院』を持参された(A.R.Artemiev 2005)。その報告書には、アルテミエフ氏が元代と推定する、前述の「古風な」瓦の写真も掲載されており、その中の平瓦凹面には、やはり糸切り痕が残されている(図4-②)。筆者は、その痕跡によって、元代に粘土板巻き作りが存在した可能性が高いこと、そして北・東アジアにおけるその意義をアルテミエフ氏に説明し、理解していただいた。なお、平瓦部凹面には、桝板連結模骨桶の痕跡も残されている。

以上のロシアで確認した2遺跡の事例は、粘土板巻き作り(あるいはその技法をもった瓦工)が、少なくとも元代には、ザバイカル地方東部やアムール川河口まで伝えられ、現地で瓦生産がおこなわれていたことを示すものである。また、この新技法への転換がこうした辺境地でも確認できることは、元の上都、大都、中都のあった中国東北地方や華北地方でもすでに発生していた可能性が高いことをも示している。筆者は諸般の事情で、元の上都、大都、中都⁽¹⁾出土の瓦を実見していないが、この可能性を前提とするならば、問題解決の鍵は、北宋か南宋代の瓦が握っていると考えるに至った。

2. 北宋代の瓦—皇帝陵の瓦は粘土紐巻き作り—

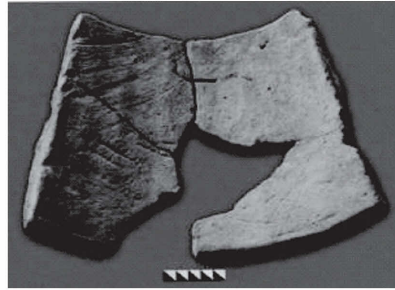
本問題を解決するために悉皆調査をおこなうことは理想であるが、広大な国土を有する中国では、とくに外国人の筆者にとって時間的・経費的に無理がある。そこで筆者は、当時の最先端技術を駆使して造営された皇帝の宮殿や陵墓、仏教寺院などに葺かれた瓦に着目した。これらの瓦は、官立の工房と工人が関与したものであり、各時代や広域における造瓦技術の普遍性を知る上で、重要な資料と考えたからである。

宣祖永安陵から哲宗永泰陵までの北宋の皇帝陵(いわゆる北宋皇陵)は、河南省鞏義市にある(河南省文物考古研究所1997)。河南省文物考古研究所などが陵園内の建物遺構や禅院も含めて試掘調査や発掘調査をおこない、大量の瓦を発見した。これらの大部分は、964年から金侵攻による北宋壊滅の1126年までに製作された瓦であると考えて大過ない。

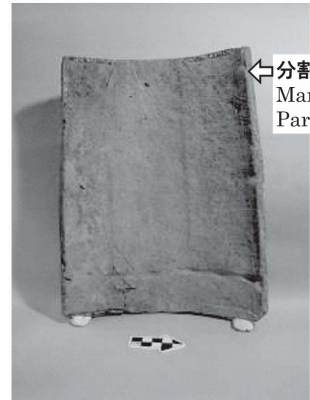
筆者は当初、北宋皇帝陵の瓦において粘土板巻き作りの痕跡が確認できると期待し、2006年2月に河南省文物考古研究所の許可を得て、瓦調査をおこなった。その結果、当初の予想に反して、北宋皇帝陵の瓦の凹面に、複数の粘土紐が積み上げられている痕跡を確認するこ



①明代：奴兒干都司・永寧寺跡出土
Ming(15C): Yongning-si Temple
Site Built by Nurgan-du-si



②元代：奴兒干都司・永寧寺跡出土
(征東元帥府付屬寺院か)
Yuan(13C): Unknown Buddhist Temple
Built by the Headquarter of Eastern
Governor-general of Emperor Before
Yongning-si Temple.



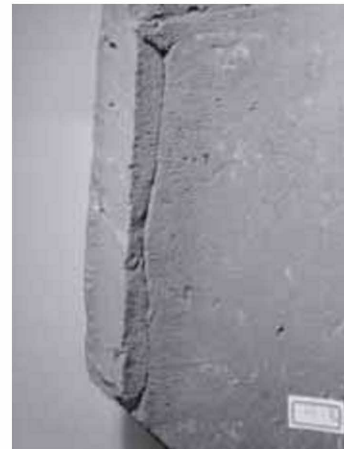
←分割突起
Marks for
Partition

③宋代：日本・博多遺跡群(南宋
客商関連の廟か)
Southern Song(12-13C): Probable
Unknown Chinese Shrine Built
by Traders from Southern Song
at Hakata Site Group, Ancient
Fukuoka, Japan.

図4 明・元・南宋代の平瓦凹面の「糸切り痕」



①復元された雷峰塔



②丸瓦凹面の粘土板合わせ目



③平瓦凹面の粘土板合わせ目



④平瓦凹面の糸切り痕

図5 南宋臨安府雷峰塔で確認された粘土板巻き作り

とができた(図2-①)。また、観察し得た丸瓦と平瓦の凹面では、糸切り痕がまったく確認できなかった。以上から、粘土紐巻き作りは、少なくとも北宋代まで存続していたことが判明した。しかも、皇帝陵の瓦であることから見て、それは華北地方においておそらく普遍的なことであったと予想される。筆者の瓦調査は、いよいよ南宋代の瓦へと向かうことになった。

3. 南宋代の瓦—雷峰塔の瓦は粘土板巻き作り—

筆者が照準を定めた瓦は、浙江省杭州市にある雷峰塔遺跡の出土品である。

雷峰塔は浙江省杭州市の西湖の南西岸にあり、磚を実心体とする木塔であった。五代・呉越国の段階に創建され、その年代は磚に残された紀年銘(971~973年)にかなり近いと推定されている。『淳祐臨安志輯逸』卷五『院』の宋寧宗慶元5年(1199)楊亢「慶元修創記」によれば、雷峰塔は、北宋末年の宋徽宗宣和3年(1121)に反乱に失敗し、敗走した方臘軍によって火がつけられ、焼亡した。残された磚積みの木製塔身部分の復興が発願されたのは、南宋が臨安府に遷都した後の乾道7年(1171)で、再建が落成したのは慶元元年(1195)であった。元軍が臨安府に侵攻して以降は、修理されることもなく、荒廃の一途をたどった。その後、雷峰塔は明末の16世紀中頃に、倭寇の攻撃によって再度焼亡した可能性がある指摘されている。磚積みの塔身だけになった雷峰塔は、西湖湖岸の名勝地「雷峰夕照」として歴史のよすがを偲ばせてきたが、ついに1924年に崩壊し、瓦礫の山と化した後は、長らく自然の小山と区別がつかない状態となっていた。

その後、2000年に浙江省文物考古研究所によって発掘調査がおこなわれ、地下から地宮や舍利容器が発見された。2002年には現代工法で5層の雷峰塔が復元され、第1~2層部分で検出された塔身部分を公開する遺跡博物館としての機能を兼ね備えている(図5-①)。以上の創建から再建、崩壊に至る経緯は、『雷峰遺珍』(浙江省文物考古研究所2002)と『雷峰塔遺址』(浙江省文物考古研究所2005)に詳しくまとめられている。

2006年10月、筆者は、浙江省文物考古研究所の許可を得て、雷峰塔遺跡出土の瓦を観察した。その結果、軒瓦を含む瓦の凹面で糸切り痕(図5-④)と粘土板合わせ目(図5-②・③)を確認した。発掘担当者の黎毓馨氏のご教示によれば、蓮華文軒丸瓦を含むこれらの瓦は、近年杭州市内で出土している臨安府関連施設の瓦と同文であることから、主として南宋の再建段階のものであるという。筆者は、蓮華文軒丸瓦が牡丹文軒丸瓦に先行する呉越国代のものである可能性を推定しているが、それは今後の重要課題とするとして、少なくとも12世紀末までには、南宋の首都であった臨安府一帯の造瓦技術は、すでに粘土板巻き作りに転換していた可能性が高いことが判明した。しかも、粘土板巻き作りへの転換が、宋王朝の臨安府遷都の過程で自発的に発生したとは考えがたいことから、粘土紐巻き作りが主流の華北地方と粘土板巻き作りが主流の江南地方の差、すなわち大きな地域差を反映していると考えに至った。

雷峰塔の瓦調査成果により、筆者は粘土板巻き作りが江南地方でいつまで遡るか、そしてその分布が江南地方を含めてどこまで広域なのか、という新たな課題に挑戦することになった。

4. 日本福岡市・博多遺跡群の中国系瓦—粘土板巻き作りの意味—

ところで、日本の福岡市にある博多遺跡群や太宰府市の天満宮（旧安楽寺）境内などからは、平安時代中・後期の瓦とは明らかに異なる、牡丹文などの植物文様を有する軒丸瓦や波状重弧文などを有する軒平瓦が出土し、中国系瓦と称されてきた（常松 2005）。文様については、浙江省寧波市にある国寧寺出土の宋代瓦との類似性が指摘されている。

筆者は 2006 年 1 月に福岡市埋蔵文化財センターと太宰府市文化財課でそれらを調査した。その結果、平瓦凹面に明瞭な糸切り痕と模骨の枠板痕があり、丸・平瓦凹面に粘土板合わせ目があることから、これらの瓦は粘土板巻き作りによって製作されたことが判明した（図 4-③）。さらに、平瓦の両側面寄りには、上下あるいは上中下に半円形の窪みがあることから、模骨の枠板上の 90 度ごと（4 ヶ所）に、半球形の分割突起が上中下あるいは上下に取り付けられていることがわかる。これは、瓦を分割するための目印である。軒平瓦の瓦当部（顎を含む）は、円錐台形の粘土円筒に薄手の瓦当粘土を貼り付ける手法によって成形されている（山崎 2000）。この瓦当成形手法は、粘土円筒の広端面に、包み込み技法のように瓦当粘土を被せる中国北方の手法とは異なるものである。

これらの技術は、全体的に見て、当時の日本在来のものとは大きく異なっている。また、牡丹文などの軒丸瓦の文様と軒平瓦の文様も、南宋臨安府のものに酷似しているといえる。したがって、博多遺跡群などの中国系瓦は、北宋代か南宋代かはともかく、宋代江南地方の瓦製作の直接的な特徴を強くもっていることから、江南地方から船で博多まで運搬されたか⁽²⁾、江南地方系瓦工人によって博多付近で製作された可能性が高い。かりに将来、博多遺跡群出土の瓦において、粘土紐巻き作りの痕跡が確認されることになれば、それは宋代の華北地方を含む北方との関係で生産されたことを示すものとなるだろう。

5. 仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」の提示

以上、筆者は、まず粘土板巻き作りの主流化が中国南方において早く出現し、南北差が発生したことを指摘し、それは中国南方において唐～南宋代よりさらに古い時代まで遡るであろうと推定した。その傍証は、朝鮮半島の百済と倭（日本）の瓦成形技法にも見いだせる。

百済は、漢城（ソウル）、熊津（公州）、泗泚（扶餘）の順に遷都する。筆者は、2005 年の第 2 回韓国瓦学会で、韓国国立文化財研究所遺跡調査室長の崔孟植氏に対し、朝鮮半島における粘土紐巻き作り主流から粘土板巻き作り主流への変化が、いつ頃発生したかについて質問した。崔氏は初歩的な見通しと断りながら、粘土板巻き作りが百済では熊津遷都後に急速に普及し、泗泚遷都後に主流となった、と回答した。崔氏の見解については今後統計的な検証が必要であるが、筆者は妥当性が高いと考えている。

6 世紀末に飛鳥寺が造営されるにあたって、泗泚遷都後 50 年の百済から瓦製作の技術者（瓦博士）などが派遣され、日本最初の瓦生産がおこなわれた。飛鳥寺創建の瓦はすべて粘土板巻き作りであり、その後の日本の瓦生産も、粘土板巻き作りが圧倒的に主流であった。この現象

は、前述した崔氏の見解通り、熊津遷都後の百済では粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへ急速に転換し、そして泗泚遷都後には粘土板巻き作りが主流になっていたことを背景として、発生したと考えてよいだろう。

中国の北朝の領域では粘土紐巻き作りが普及していたので、熊津期百済で徐々に主流となる粘土板巻き作りは、自生か、北朝以外の地域との関係で導入されたことになる。

熊津期の百済王陵である公州市・宋山里古墳群の武寧王陵には、南朝系の磚室墓や高い工芸技術の導入に裏打ちされた副葬品が存在し、また同6号墳で発見された「梁官瓦為師矣」銘磚（近年、韓国では「瓦」を「品」と読むことが多い）には、南朝梁との外交・文化上の強い結びつきが示され、そして周辺の貴族墓には鶏頭壺、青磁有蓋四耳壺、両耳盤口瓶などの南朝製陶磁器が副葬されている。さらに、大通寺（南朝・梁武帝の大通・中大通年間は527～535年）などの仏教寺院の造営も、熊津期から本格的に開始された。百済は、泗泚遷都直後の541年にも、武帝が統治していた梁に対して、仏教經典や工匠、画師の派遣を求めている。こうした状況から見れば、熊津期百済の粘土板巻き作りも、中国南朝からの諸技術導入の一環として、造寺工人や瓦工人が派遣される過程で新たに導入されて次第に普及し、泗泚遷都後にその普及が一層促進され、主流となった可能性がきわめて高いといえよう。

筆者は、以上のような熊津期と泗泚期の百済、そして飛鳥時代の倭国の状況に基づいて、粘土板巻き作りが主流となる契機が、南朝のいずれかの王朝まで遡ること、そしてそれが南朝の首都・建康を含む江南地方であること、さらにその現象が華中と華南で比較的急速に普及した結果、それ以後の中国では南北二系統の瓦成形が展開したらしい、という仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」を提示した（佐川2007）。粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換に関する瓦調査の照準は、いよいよ南朝の首都・建康（南京市）に合わされることになった。

6. 仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」の検証

2006年12月の奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所の共同研究の調査地は、偶然にも江南地方であり、南京大学文化與自然遺産研究所（賀雲翱教授）で南朝の首都・建康出土瓦を調査する機会がめぐってきた（賀2005、中国社会科学院考古研究所ほか編2008、本書）。

その結果、南京市弓箭坊出土の凸面に銭文叩きをもつ呉・西晋～東晋代の丸瓦の凹面（図6-①）と、南朝宋「大明五（461）年明堂壁」銘磚（賀ほか2006）とともに出土した丸瓦の凹面（図6-②）では、粘土紐巻き作りの痕跡が確認された。また、南京市・鐘山の南朝祭壇遺跡は、宋の孝武帝が大明3（459）年に造営した建康城の「北郊壇」と推定されている（南京市文物研究所ほか2003）。この1号祭壇の南の附属建築区から出土した平瓦凹面では、粘土板巻き作りを示す糸切り痕が確認された（図6-③）。このことと、熊津期百済以後に推定される粘土板巻き作りの主流化を総合的に捉えるならば、南朝建康城においては粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が南朝の宋代までの間にはじまり、その後の斉～梁代において粘土板巻き作りが主流となっていった、と予想される（図7）。



①丸瓦凹面の粘土紐



②丸瓦凹面の粘土紐



③平瓦凹面の糸切り痕



④丸瓦凹面の粘土板合わせ目

図6 南朝建康出土瓦に見る粘土紐・板巻き作りの痕跡

しかし、上記の遺跡については、丸・平瓦の調査が不十分である。また、南京大学での瓦調査においては、梁中大通4（532）年に死去した梁南平王蕭偉の墓の門闕遺跡（南京市文物研究所ほか 2002）から出土した軒丸瓦を観察したが、大量に出土した丸・平瓦は調査していない。同様に、鐘山1号寺廟遺跡と宋代初期創建の上定林寺と推定されている鐘山2号寺廟遺跡（賀 2007）から出土した軒丸瓦は観察したが、丸・平瓦はほとんど調査していない。したがって、仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」をより確固としたものにするためには、建康城と周辺遺跡出土の丸・平瓦の統計的な分析が不可欠であり、とくに梁南平王蕭偉墓の門闕遺跡出土瓦の分析は重要である。

南京市での調査に引き続いておこなわれた揚州城出土瓦の調査では、唐代と推定される丸瓦の凹面で粘土板合わせ目と糸切り痕を確認し、粘土板巻き作りが存在したことが判明した（図6-④）。揚州城出土の唐代瓦においては、その凹面に粘土紐巻きの痕跡を残す事例が確認できなかったことも、粘土板巻き作りが主流であったことを傍証するものであろう。

今後、江南地方におけるこうした事例をより多く確認し、仮説の信頼性を高めていくことはもちろんだが、同様の調査を華中や華南の複数の遺跡で実施し、この仮説が中国の南方でどの程度適応するのかについても、検証する必要がある。

7. 広州市・南越国宮署遺跡の瓦調査—粘土板巻き作りは唐・南漢代から主流か—

そこで、2008年2月に、広東省広州市にある南越国宮署遺跡の瓦調査をおこなった。この遺

跡は広州市街地に位置し、前漢代・南越国の都城遺跡の文化層の上に、歴代の地方官衙の文化層や五代十国時代の南漢皇宮遺跡の文化層が累々と重複する、という特徴をもつ。したがって、南越国宮署遺跡は、華南地方の遺物の編年研究をする上で、最適な条件を有している。

遺跡から出土した軒丸瓦については、南越王宮博物館籌建処の李灶新氏が文様によって分類し、出土地層などとの関係で時代比定を行っている（李 2004）。筆者は李灶新氏を訪ね、瓦成形技法の転換に関する研究の成果と意義を説明しながら、李氏が分析した南越国宮署遺跡出土の主要な軒丸瓦を足早に観察することができた。その結果、前漢代から南朝代までの軒丸瓦は粘土紐巻き作りか、それを主流として製作された可能性が高く、唐代と南漢代の軒丸瓦は若干の粘土紐巻き作りを残しつつも、主として粘土板巻き作りで製作され、宋代以後の軒丸瓦は粘土板巻き作りで製作された、という初歩的な見通しを得ることができた。

また、広州市文物考古研究所では、副所長の朱海仁氏が研究した南漢・皇宮遺跡（中山四路致美齋）の南漢瓦礫層出土の、青磁と見まがう青釉瓦などを観察した（朱 2005、広州市文物考古研究所 2005）。そして、数点の瓦で粘土板合わせ目を確認し、前述した見通しを補強することができた。朱海仁氏のご教示によれば、『南漢書』には南漢の宮殿を「玉堂珠殿」と形容する記載があり、それが青釉瓦で葺いた建物であったことはまちがいないようである。

筆者は、朱氏と李氏に南越国宮署遺跡出土瓦の悉皆調査を託して、広州市を後にした。唐～南漢代にはすでに粘土板巻き作りが主流になっていることから、江南地方も含めた華中・華南地方の粘土板巻き作り主流化の時期は、華北地方と比較して早いといえる。中国の瓦成形技法においては、華中・華南地方と華北地方との南北差（南北二系統）が南朝～唐代において発生し、南宋代まで継続した可能性が高いという見通しを得ることができた。

C 軒瓦などの南北差と軒平瓦の等級

1. 軒丸瓦の南北差

(i) 江南地方の南朝～唐代前半の軒丸瓦は外縁が高い

南朝の首都・建康城の軒丸瓦の外縁高は、北朝の外縁高と比較すると明らかに高く、内区はその高さの中に収まっており、瓦当裏面に回転台による明瞭な同心円ナデ調整が残されている（中国社会科学院考古研究所ほか編 2008、本書の賀雲翱氏論文参照）。隋～唐代前半（6世紀末～8世紀）になると、軒丸瓦の外区内縁に連珠文を巡らすようになる。この段階でも、南朝の瓦当に見られた特徴は、依然として存続する。

北朝の軒丸瓦の外縁は非常に低く、内区文様の方が高い。瓦当裏面は平坦にナデ調整しているが、江南地方のように明瞭な同心円ナデには至っていない。このような特徴は、隋～唐前半まで存続する。しかし、鄴城遺跡の五胡十六国時代の軒丸瓦は、外縁高が内区より高い。

(ii) 唐代後半には全国的に外縁の幅広化、内区突出化

唐代後半になると、揚州城遺跡の軒丸瓦では、内区が中房を中心に盛り上がり、外縁は周辺

に向かって低く傾斜して幅広になり、瓦当裏面からは同心円状のナデ調整が消える。このような特徴は、長安城遺跡や洛陽城遺跡の同時期の軒丸瓦でも確認され、全国的な現象といえる。なお、揚州城遺跡の軒丸瓦では、内区が深めの范型に瓦当粘土をしっかりと詰め込むために、瓦当裏面から指オサエした窪みが残されている。

雷峰塔遺跡の軒丸瓦のうち、筆者が呉越国（五代十国時代）創建のものとして推定している蓮華文軒丸瓦は、再び外縁が幅狭くなり、内区よりやや高くなる。また、唐代後半において簡略化された蓮華文が、立体化した整ったものとなり、一種の復古現象が見られる。しかし、南宋代の牡丹文を含む植物文軒丸瓦では、瓦当面全体が低く平板化する。

（iii）鄴城遺跡五胡十六国時代の軒丸瓦と漢城期百済・風納土城の軒丸瓦の銭文の関連性

鄴城遺跡は五胡十六国時代（316～386年）の後趙、前燕、冉魏の首都でもあり、瓦調査の際に、その段階の軒丸瓦が3種類確認された（本書の2を参照）。それは大きく見るならば、魏・西晋代という前時代の軒丸瓦や隣国・高句麗の軒丸瓦との関連性があり、さらに漢城期百済の首都・風納土城で出土した揺銭樹文系軒丸瓦とも関連性があることから注目される。

鄴城例は全体的に見て、半球形の中心飾と文様の4単位構成が前時代からの伝統をとどめており、蕨手風雲気文が4単位表現されている例がある。菱形の蓮弁は、高句麗の軒丸瓦の蓮弁表現と類似する。三者に共通な文様要素には、中心飾りから発する茎と蕾を想起させる文様があり、これも高句麗の蓮蕾文軒丸瓦の中に類似要素を認めることができる。これは、鄴城例の「丸に十文字」文とも表現的に共通するが、「丸に十文字」文は銭文であり、風納土城出土の軒丸瓦で特徴的な揺銭樹文の銭文の表現と同一である。

さて、風納土城出土軒丸瓦の文様も、4単位構成を基本としており、揺銭樹文として表現されているが、揺銭樹文軒丸瓦は、南北朝時代も含めて中国にはない。風納土城例の銭文では、「丸に十文字」文と枝が45度ずれているが、鄴城遺跡例では「丸に十文字文」と枝が一致している。また、風納土城の軒丸瓦の製作技法（一本作り式、嵌め込み式）は、鄴城遺跡の軒丸瓦が接合技法によるのとは大きく異なっている。しかし、漢城期百済と呉・晋・南北朝時代には、とくに陶磁器において富貴を象徴する銭文が流行していたので、同時期の瓦にも採用されたのであろう。朱岩石氏によれば、銭文を採用した軒丸瓦は、遼寧省朝陽市北塔遺跡からも出土しているという。銭文は広く分布したが、風納土城の軒丸瓦については、中国北方との関連を今後追究する必要がある。

（iv）南朝の軒丸瓦の蓮華文と熊津期・泗泚期百済の軒丸瓦の蓮華文

この問題については、本シンポジウムにおける金誠龜氏、金有植氏、亀田修一氏の評価を尊重したいが、簡単にコメントしておく。漢城期百済・風納土城の軒丸瓦には、素弁の例はない。2008年に城内中央の慶堂地区で発見された軒丸瓦は、複弁蓮華文であり、北魏・平城の影響も指摘されている（ソウル歴史博物館ほか2008）。また、南接する夢村土城の軒丸瓦の蓮華文は、高句麗的な素弁である。したがって、漢城期百済の軒丸瓦の蓮華文が、熊津期以後の百済の軒

丸瓦の文様の源流になったとはいえない。

本節（i）でも述べたように、南北朝時代の外縁高の南北差は明瞭であるので、その点では熊津期・泗泚期百済の軒丸瓦は、外縁高が内区高より高く、南朝的である。しかし、百済との関係が密接な梁代を含む南朝の軒丸瓦の蓮華文は、熊津期・泗泚期百済のように弁央が幅広のものは少なく、弁端が尖り気味の例も多い（中国社会科学院考古研究所ほか 2008 を参照）。とくに、弁端点珠の遡源である、弁端が尖り気味で反り上がる例や、飛鳥寺花組のように弁端に切れ込みが入る例もまったくない。

そこで、熊津期百済の軒丸瓦の弁端点珠的な蓮華文に類似するものを探し求めると、仏像の台座や青磁尊の蓮華文に多くの例を見いだすことができる。おそらく、百済は、南朝の軒丸瓦の蓮華文を直接受容せず、他の工芸品の蓮華文を積極的に選択して、百済的な軒丸瓦を作り上げたのであろう。

2. 丸瓦の南北差

（i）南朝の丸瓦玉縁部凹面に布目痕なし

南京大学で調査した南朝の丸瓦には、筒部と肩部が 90 度近い角度をもち、それらの凹面には連続する布目痕が残されているが、玉縁部凹面には布目痕がない、という特色が共通して認められる（中国社会科学院考古研究所ほか編 2008、本書 3 の賀雲翱氏論文参照）。これは、丸瓦用模骨が一木の円筒形で、玉縁部用の突出部が作り出されていないことが原因である。布袋を被せてその一端を閉じた円筒形の模骨に、粘土紐か粘土板を巻き付け、その狭端の凹面側に肩部と玉縁部を兼ねた粘土を接合した結果、肩部凹面までは筒部凹面から連続する布目痕が残されるが、玉縁凹面には布目痕が付かないのである。

このような玉縁部の特色は、筒部凸面に銭文叩きを施した呉～東晋代の丸瓦（建康城内出土）が目下最古であり、揚州城出土の唐代丸瓦を最新として確認できる。呉以前の事例の存否については、今後の検討課題である。しかし、浙江省杭州市の雷峰塔遺跡の南宋代（あるいは呉越国代も含むか）の丸瓦では、玉縁部凹面にも布目痕があり、筒部と玉縁部を繋ぐ肩部はなで肩になっている。したがって、江南地方の丸瓦の模骨は、唐代から南宋代までの間に、玉縁部用の突出部が付くビール瓶形に変化し、粘土板巻き作りで丸瓦全体を成形し、肩部に断面三角形の粘土紐を貼り付ける手法に変化したといえる。

（ii）北朝の丸瓦玉縁部凹面に布目痕あり

一方、北朝の北魏代や東魏・北斉代の丸瓦は、玉縁部凹面に筒部から連続する布目痕を残し、肩部凹面がなで肩をなしている（本書の 3 を参照）。これは、ビール瓶形の模骨に布袋を被せて、粘土紐巻き作りで丸瓦全体を成形し、肩部に断面三角形の粘土紐を貼り付ける手法を採用した結果である。この手法は、江南地方では、前述したように唐代から宋代までの間に出現した。そして西安市と洛陽市の隋・唐代の丸瓦でも存続するが、それらは北朝歴代の丸瓦と比較すると、玉縁長が短くなり、筒部凸面と肩部凸面が鋭角をなす場合が多い。

したがって、南北朝時代の丸瓦の製作手法には、明瞭な南北差があったといえる。それが南方（江南地方）でも、唐代から南宋代までの間に北方の手法を受容し、統一された。南北差とその後の統一化の背景については、今後の課題としたい。

（iii）百済と飛鳥時代の玉縁部凹面に布目痕がない丸瓦の源流

じつは、南朝の丸瓦と同様の特色をもつ丸瓦が、韓国公州市の熊津期百済と扶餘邑の泗泚期百済の丸瓦にも、また飛鳥時代の飛鳥寺や四天王寺、若草伽藍の丸瓦にも存在することは、すでによく知られたことである。しかし、漢城期百済の風納土城や夢村土城からは、この種の丸瓦は一切出土していない。したがって、円筒形模骨を使用したこの種の丸瓦の製作手法の源流は、明らかに首都・建康城を含む南朝であったといえる。これは、前述した南朝の粘土板巻き作りの熊津期百済への伝播と連動したものであり、非常に重要な発見である。

熊津期百済以後の丸瓦には、①この種の玉縁式丸瓦のほかに、②玉縁部凹面に布目痕を残す玉縁部用突出を有する模骨で製作された丸瓦と、③行基式丸瓦があった。漢城期百済の風納土城では、②と③の丸瓦と、④円筒模骨を使用し、玉縁部を削り出す丸瓦も存在した。飛鳥寺でも①（弁端点珠のいわゆる星組の丸瓦部）と③（弁端切れ込みのいわゆる花組の丸瓦部）の丸瓦が製作され、さらに飛鳥時代の他の寺院では②の丸瓦も存在したのは、そうした漢城期に遡る百済の丸瓦の多様性の伝統が反映しているのである。

一方、南朝では、①以外の②～④の丸瓦はまったく存在しなかった。北朝でも、②以外の丸瓦はまったく存在しなかった。

3. 軒平瓦の南北差

（i）南朝に軒平瓦はなかった—百済や飛鳥寺との関係—

南京大学での瓦調査では、南朝に軒平瓦が存在したという証拠はなかった。調査した波状重弧文軒平瓦は段顎をもっていることから、宋代以後の軒平瓦と見なされる。賀雲翱氏の南朝関係の論文においても、軒平瓦はまったく提示されていない。このことから、少なくとも南朝の首都・建康では、軒平瓦が製作されていなかった可能性が高い（大脇 2005）。これは、北朝の北魏で平城首都段階から波状文・波状重弧文軒平瓦が製作されていた状況と大きく異なる。

このことから思い起こされるのが、熊津期百済には軒平瓦が皆無であり、泗泚期百済には軍守里廢寺から波状重弧文軒平瓦が数点出土し、扶蘇山城からいわゆる土器口縁軒平瓦が若干出土している程度で、6世紀までの百済では軒平瓦はほとんど製作されていなかった（金有植 2004）という事実である。こうした状況は、古新羅の段階においても同様であった。さらに、飛鳥寺においても、瓦当文様を有する軒平瓦はまったく出土していない。これは、百済の瓦博士自身が瓦当文様を有する軒平瓦を知らなかったからにほかならない。百済では、平瓦の広端を軒先に向けて葺くことが一般的であったと推定されている（花谷 2000）。おそらく、南朝でもそうであったのであろう。

前述した粘土板巻き作りの主流化と円筒形模骨使用の玉縁式丸瓦とともに、平瓦が軒平瓦を

代用する伝統も、南朝から熊津期百済へ伝播し、さらに倭国へも伝えられたと考えると大過ないようである。熊津期百済と南朝との密接な関係を改めて強く感ずる。

2007～2008年に発掘調査が行われた韓国益山市の百済・帝釈寺の金堂跡からは、平瓦広端部凸面に瓦当粘土を貼り付け、獣面文を中心飾りとする均整忍冬唐草文を范押しした軒平瓦が、単弁軒丸瓦とともにまとまって出土した（韓国国立扶餘文化財研究所2008）。火災の痕跡も確認されたので、この軒平瓦が7世紀前半に製作されたものであることはまちがいない、百済説と統一新羅説が混沌としていた積年の課題が解決した。中国で范型を使用した軒平瓦がはじめて製作されたのは北宋代であるので、百済・帝釈寺跡の范型を使用した軒平瓦は、百済で創作されたのであろう。

(ii) 有顎軒平瓦の瓦当成形手法の南北差

北魏代に最初の軒平瓦が出現してから唐代までは、平瓦用粘土円筒を上下逆転させ、広端面を瓦当面として、上方から波状文や波状重弧文を施文していた。したがって、隋・唐代において広端面が狭端面と比べわずかに厚くなる場合はあるものの、段顎を附加して瓦当面を大きくするようなことはなかった。それが宋代、遼代になると、段顎をもった有顎軒平瓦が登場する。

顎を含めた瓦当部の成形手法にも、南北差があることがわかってきた。北方（遼～元代）では、平瓦用粘土円筒を逆転させ、広端面を帯状粘土で軽く包み込むようにしながら、瓦当を成形し、上方から波状重弧文等を施文している。北宋皇帝陵の軒平瓦では顎は明瞭に作り出されていないが、洛陽にあった北宋西京関連遺跡の軒平瓦では段顎となっており、平瓦の広端面を瓦当粘土で軽く包み込むようにしながら、成形・施文している。

これに対して、雷峰塔遺跡の南宋代の軒平瓦では、平瓦広端面の凸面側に帯状に瓦当粘土を貼り付けて、表裏をナゲ調整した後に、瓦当面に上方から波状重弧文などを施文している。また、福岡市の博多遺跡群出土の宋系軒平瓦においても、雷峰塔遺跡と同様の瓦当成形がおこなわれている。これについて山崎信二氏は、瓦当裏面に回転ナゲ調整を施しているので、円錐台形粘土円筒を回転台上に置いた状態で、広端凸面側に帯状に瓦当粘土を貼り付ける作業をおこない、その後に粘土円筒を上下逆転させて上方から施文した、と工程復元をしている（山崎2000）。筆者も山崎氏の工程復元を支持したい。

このように、中国における有顎軒平瓦の瓦当成形は、南北で大きく異なっていたのである。

D まとめ

1. 中国江南地方における粘土板巻き作りの主流化の時期と百済・倭国への影響

中国南方の少なくとも江南地方では、南朝の斉～梁代に粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が急速に進展し、後者が主流となった可能性が高い（「粘土板巻き作り南朝主流化説」、図7）。その影響は、たとえば梁代には熊津期百済へ伝播し、百済の瓦製作を粘土板巻き作り主流へと徐々に転換させ、さらにはそれが泗泚期百済でいっそう促進され、ついには百済から粘

土板巻き作り主流の成形技法が6世紀末に日本へ伝播することになったのであろう。

上記の推定は、南朝（江南地方）の軒丸瓦に見られる外縁高が内区より高いことや、南朝の丸瓦玉縁部の製作手法が、熊津期百済の軒丸瓦へ強く影響していることから、妥当性が高いと考えている。

2. 粘土板巻き作りの中国北方・北アジアへの普及とその背景—瓦成形技法元統一説—

華北地方や中国北方を含む北アジア地域の瓦製作は、北宋・遼・金代まで、粘土紐巻き作りが完全に主流であった。それが元代になると、アムール川河口やザバイカル地方という最果てまで、瓦成形技法が粘土板巻き作りに転換している。筆者は、この背景について、次のように推定している。

すなわち、南宋が1279年に元によって滅ぼされる際に、元が何らかのかたちで、たとえば南宋官窯や江南地方などの瓦工人を大量に強制移住させるなどして、南宋の領域にあった粘土板巻き作りを北方へ広く導入した結果、まず中国北方で、さらに北アジアでも粘土板巻き作りへの大転換が図られた可能性が高いと考える。したがって、「瓦成形技法元統一説」を仮説として提示しておく（図7）。なお、この点については、今後、文献資料の裏付けを取ることが必要である。そして、粘土板巻き作りが元の上都、中都、大都を含めた華北地方や中国北方を含む北アジア地域に導入され、粘土紐巻き作りが衰退、消滅していく経緯についても、実地調査をおこなって検証する必要がある。

3. 統一新羅や日本で改良・創出された瓦製作・施文手法

新羅が676年に朝鮮半島を統一すると、平瓦製作用の桶に改良が加えられる。それまで枰板を紐で連結していた可動式のタイプが、次第に枰板を紐で連結しない非可動式のタイプに変化していく。このタイプの桶は8世紀末に日本の九州北部へも伝播し、11世紀頃まで使用された（図7：栗原1999）。なお、中国では現代まで枰板連結模骨が存続した。

日本では、8世紀前半に平城宮の造瓦組織で「平瓦一枚作り」が開発され、粘土板桶巻き作りに急速に取って代われ、主流となっていった。これは、日本で独自に創出された瓦成形技法である。ただし、陸奥国と出羽国のように、8世紀中葉以後、丸瓦だけは粘土紐巻き作りで、平瓦は一枚作りで製作された地域もある。

施文手法については、軒平瓦の施文に範型を使用することが、泗泚期百済（7世紀前半の帝釈寺跡）や倭国（範型を瓦当上方か側方から押圧）、そして統一新羅（範型を下に置く包み込み技法）で、中国よりも早く開始された。なお、中国で範型を使用する軒平瓦の施文を最初に試みたのは、北宋代（北宋皇帝陵）の例であり、範型を粘土円筒の上方から押圧する手法である（佐川2006）。この施文手法は金～東夏代のアムール川流域でも確認されるが、ほとんど流行しなかった。広く流行したのは、三角形の範型を下に置いた包み込み技法によって軒平瓦を製作する手法である。この種の瓦を中国では滴水瓦と呼んでおり、宋代の実態はなお明らかではないものの、遼や西夏で大いに発達し、元以後も主要な軒平瓦の一つとなっていった。

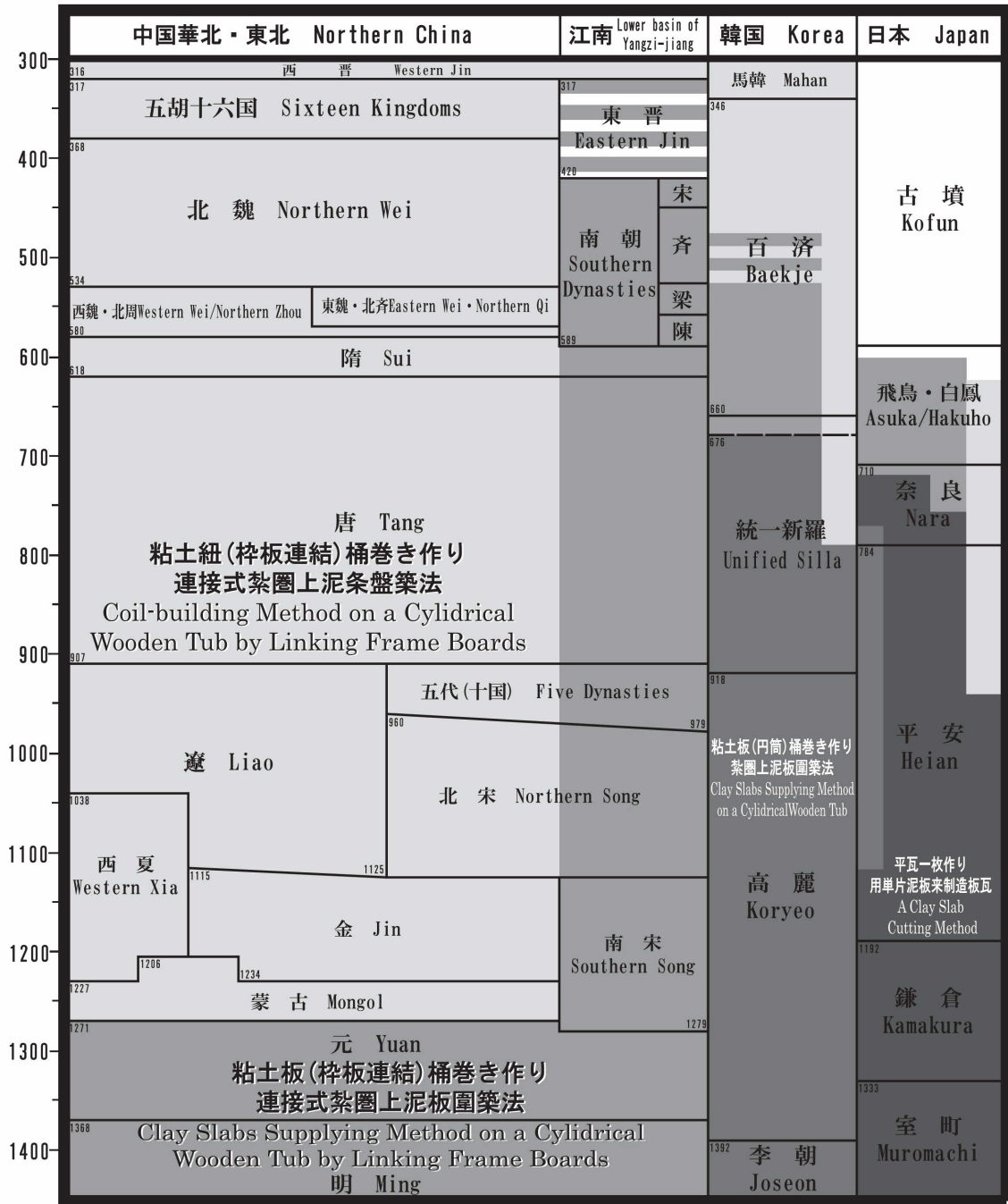


图7 中韓日瓦製作技法の変遷

謝 辞 以上のように「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換の問題を、東・北アジア的に比較検討することは、じつに重要な意義がある。最後に、2005年以來、中国での瓦調査の機会を与您にいただき、本シンポジウムにおいて発表の機会を与您にいただいた日本の国立文化財機構 奈良文化財研究所、中国社会科学院考古研究所、韓国国立文化財研究所、そして日本、中国、韓国、ロシアでの瓦調査でお世話になった皆様に対して、衷心より感謝申し上げる次第である。なお、共同研究「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播」の研究代表者であった山崎信二氏が2009年3月をもって奈良文化財研究所を退任された。末筆ではあるが、長年にわたる氏のご指導とご鞭撻に深く感謝し、今後のご健勝を衷心より祈念申し上げたい。

註

- (1) 筆者は、2006年9月に河北省張家口市にある元中都遺跡を見学した際に、遺跡内に散布している瓦を仔細に観察したが、粘土紐巻き上げの痕跡を残す例は皆無であった。
- (2) 福岡市埋蔵文化財センターの常松幹雄氏によれば、瓦の胎土も日本の瓦と異なるものがあるという。

参考文献

- A.R.Artemiev 2001, Some Results of Archaeological Researches of the Buddhist Temples of the XVth Century in the lowers of the Amur River. *Ancient and Medieval History of Eastern Asia to 1300th Anniversary of Formation of Bohai State*. Edited by A.R.Artemiev, Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of the Far East, Far Eastern Branch of the Russian Academy of Sciences. Vladivostok, Russia.
- A.R.Artemiev 2005, *Buddhist Temples of the 15th Centuries in the Lower Amur*, Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of the Far East, Far Eastern Branch of Russian Academy of Sciences, Vladivostok, Russia.
- 大脇 潔 2005 「老北京胡同薈紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代撰河泉寺院論攷集』第2集、撰河泉古代寺院研究会・撰河泉文庫
- 賀雲翱 2005 『六朝瓦当與六朝都城』文物出版社（中国）
- 賀雲翱・邵磊 2006 「南京發現南朝“明堂”磚及其學術意義初探」『東南文化』2006年第4期
- 賀雲翱 2007 「南京鐘山二号寺遺址出土南朝瓦当與南朝上定林寺關係研究」『考古與文物』2007年第1期
- 河南省文物考古研究所 1997 『北宋皇陵』中州古籍出版社（中国）
- 韓国国立扶餘文化財研究所 2008 『益山 帝積寺—第1次調査—』（現地説明会資料）
- 金有植 2004 「三国時代軒平瓦の發生に関する小考」『奈良国立博物館研究紀要・鹿園雜集』第6号、奈良国立博物館
- 栗原和彦 1999 「大宰府の九・十世紀の平瓦」『瓦衣千年—森郁夫先生還曆記念論文集—』日本・森郁夫先生還曆記念論文集刊行会
- 広州市文物考古研究所編 2005 『鉢積寸累』（広州文物考古集4）、文物出版社（中国）
- 佐川正敏 1992 「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える」『日本中国考古学会会報』第2号、日本中国考古学会
- 佐川正敏 2006 「唐代から明代までの造瓦技術の変遷と変革—長江流域からアムール川流域の軒平瓦を中心に—」『国際シンポジウム・東北アジアにおける遼・金・蒙元期の都市』（資料集1・2）、文部科学省研究費補助金「中世考古学の総合研究」プロジェクト・中国吉林大学辺疆考古研究中心共催
- 佐川正敏 2006 「中国造瓦技術の一大変革：『粘土紐巻き作り』から『粘土板巻き作り』への転換について

- の研究』『アジア流域文化論』Ⅲ、東北学院大学オープンリサーチセンター
- 佐川正敏 2006 「宋・金代における『粘土円筒上方范型押圧施文』による軒平瓦の発見」『アジア文化史研究』第6号、東北学院大学大学院文学研究科
- 朱海仁 2005 「広州市中山四路致美齋南漢與宋代建築遺址」『羊城考古發現與研究（一）』（広州文物考古集5）、広州市文物考古研究所（中国）
- 浙江省文物考古研究所 2002 『雷峰遺珍』文物出版社（中国）
- 浙江省文物考古研究所 2005 『雷峰塔遺址』文物出版社（中国）
- ソウル歴史博物館・韓神大学校博物館 2008 『ソウル風納土城慶堂地区2次発掘調査現地説明会資料集』
- 中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所共編 2008 『四至十世紀東亜制瓦技術研究』（古代東亜地区制瓦技術変遷與伝播研究国際学術研討会会議資料）
- 常松幹雄 2005 「博多出土中世瓦の産地について（予察）」『平成16（2004）年度福岡市埋蔵文化財センター一年報』（第24号）、福岡市教育委員会
- 南京文物研究所・南京棲霞区文化局 2002 「南京梁南平王蕭偉墓闕発掘簡報」『文物』2007年第7期
- 南京文物研究所・中山陵园管理局文物处・南京大学歴史系 2003 「南京鐘山南朝壇類建築一号壇発掘簡報」『文物』2003年第7期
- 花谷 浩 2000 「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究 I—飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—』奈良国立文化財研究所
- 山崎信二 2000 『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊
- 李灶新 2004 「南越国宮署遺址2000年発掘出土瓦当研究」『華南考古』1、中国・広東省文物考古研究所・広州市文物考古研究所ほか